OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	メタフュシカ　第46号　彙報
Author(s)	
Citation	メタフュシカ. 2015, 46, p. 109-116
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/54522
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【彙報】

○　哲学哲学史・現代思想文化学

現在、学部の哲学・思想文化学専修には 24 名が在籍しています。大学院の哲学哲学史博士前期課程には 10 名、同後期課程には 12 名が、大学院の現代思想文化学博士前期課程には 4 名、同後期課程には 7 名が在籍しています。上野修教授、入江幸男教授、舟場保之准教授、および須藤訓任教授、望月太郎教授、中村征樹准教授、野々村梓助教の各教員が、臨床哲学所属の教員と連携しつつ、学生の教育・研究指導にあたっています。なお、望月教授は 2014 年 4 月より、大阪大学 ASEAN センター長（バンコクオフィス常駐）として赴任しています。

本年度の講義・演習は、「Japanese Philosophy and Thought in Global Contexts」「様相論理学入門」「Discussing Huw Price's "Expressivism, Pragmatism and Representationalism"」（入江教授）、「スピノザと現代の実在論」「真理のデフレ理論と精神分析理論」「スピノザ『エチカ』を読む XVI」「ラカンを読む」（上野教授）、「カント実践哲学に関する論争について」「J. ハーバーマスの思想 VIII」「ドイツ哲学基本文献講読 I・II」「カント『実践理性批判』を読む VIII・IX」（舟場准教授）、「ハイデガー研究(3)・(4)」「現代哲学史概説」「ニーチェの『ツァラトゥストラ』(3)・(4)」（須藤教授）、「発展途上国における教育開発のための哲学実践」（望月教授・Chim PHORST 氏）、「脳神経科学と社会」、「経済のなかの現代科学」（中村准教授）、「Writing Humanities Papers in English I・II」（中村准教授・和泉悠氏）、「現代科学を読み解く(2)」（中村准教授・江口太郎氏）、「デカルト『省察』を読む」（野々村助教）という題目で行われています。その他に、修士論文・博士論文執筆のための演習が定期的に行われ、活発な研究・討論が行われています。

非常勤講師として、入谷秀一氏（大阪大学）に「環境思想の諸問題」、Nick ZANGWILL 氏（ハル大学・イギリス）に「Themes in Contemporary Analytic Philosophy（現代分析哲学における諸テーマ）」、濱岡剛氏（中央大学）に「古代ギリシア哲学における目的論」、Michel DALISSIER 氏（同志社大学）に「哲学的方法論（Philosophical Methodology/ Méthodologie Philosophique）」、重田謙氏（長岡技術科学大学）「ウィトゲンシュタイン（『論理哲学論考』と『哲学探究』）における意味論と実在論」という題目で授業をしていただいています。

ホームページ（http://www.let.osaka-u.ac.jp/philosophy）と You Tube（「ヴィデオ・メタフュシカ」）を通じて研究室の活動状況・研究会を撮影した動画などを公開しています。海外に研究成果を発信するために、欧文機関紙 *Philosophia OSAKA* を刊行しています。

哲学哲学史・現代思想文化学の研究会として、handai metaphysica を開催しています。2014 年 12 月 13 日には、第 18 回 handai metaphysica 特別講演会として、Pratoom ANGURAROHITA 氏（チュラロンコン大学・タイ王国）に "Theism and Buddhism: a pragmatic approach" と題して講演をしていただきました。2015 年 3 月 10 日には、第 18 回 handai metaphysica 研究例会として、『メタフュシカ』第 45 号の合評会を行い、活発な質疑応答がなされました。

2014 年 11 月 4 日に、ユニセフが定める「世界哲学の日」に合わせて記念行事を開催し、入江教授が「『攻殻機動隊』の自我論」と題して記念講演を行いました。

学生主体の研究会「哲学ワークショップ」を定期的に開催しています。2015 年 1 月 15 日には、第 12 回哲学ワークショップ（テーマ「アポロン的なものとディオニュソス的なもの――トーマス・マン『ブッデンブローク家の人々』研究より」「主体はどこに在るか――ヒュームあるいはラカン」

「崩落と反復：ジャック・デリダにおける忘却の二つの位相」「『私』とは何か――スピノザとライプニッツを通して考える」）、同年 6 月 27 日には第 13 回哲学ワークショップ（テーマ「哲学的に見たサルトルの自由」「哲学者と原子力――ハイデガー、アンダース、ヨーナスの技術論」「スピノザ『エチカ』の想像知における実践的機能の検討」）がそれぞれ行われました。

上野教授が、2014 年 11 月 15 日にオランダ（レインスブルフ）で開催された国際会議 De Vereniging het Spinozahuis にて、“The Infinite without View, Eternity without Memory: Spinoza in contrast with Leibniz” と題して講演を行いました。2015 年 6 月 27 日には、学習院哲学会（学習院大学）にて、「実在論の極北、スピノザ」という題目で講演を行いました。2015 年 10 月 10 日には、スピノザ協会第 64 回研究会・合評会（大阪大学）にて、「スピノザ『政治論』翻訳をめぐって――“jus” をめぐる若干込み入った事情」という題目で発表しました。

上野教授が 2015 年度前期に、東北大学文学部・文学研究科にて集中講義を担当しました（2015 年 7 月 21 日～ 24 日）。

上野教授が共訳者となっている『ライプニッツ著作集　第 II 期　第 1 巻　哲学書簡』（工作舎）が、2015 年 5 月 28 日に刊行されています。

入江教授が、2015 年 4 月 17 日に東北大学で開催された国際会議「第 4 回日独 6 大学長会議（HeKKSaGOn）」にて、“Indeterminacy and creation in cultural comparison” という題目で発表しました。

入江教授が共著者となっている『フィヒテ知識学の全容』（晃洋書房）が 2014 年 12 月 10 日に、*Kant, Fichte, and the Legacy of Transcendental Idealism*（Halla Kim and Steve Hoeltzel（ed.）, Lexington Books）が、さらに同年 12 月 18 日に、同じく共著者となっている *Begegnungen in Vergangenheit und Gegenwart*（Claudia Rammelt, Cornelia Schlarb, Egbert Schlarb（hsg.）, Lit Verlag）が、2015 年 1 月 23 日に刊行されています。

入江教授が中心となって、欧米から 11 名の研究者を招待し、2015 年 4 月 22 日～ 24 日の期間で国際会議 The Conference on transcendental philosophy and metaphysics（大阪大学・オマハ大学共催）が開催されました。同会議にて、入江教授が “An Alternative Transcendental Argument”、舟場准教授が “On the Cognitive Theory of Morality by Jürgen habermas”、嘉目道人氏（哲学哲学史博士後期課程修了）が “Consequences of the Transcendental-Pragmatic Consensus Theory of Truth” という題目でそれぞれ発表を行いました。

舟場准教授が、2015 年 8 月 26 日～ 28 日にミュンヘン大学（ドイツ）で開催された国際会議 16. Deutschsprachiger Japanologentag において、“Karatani Kojin und die Potenzialität der Kritik an der Moderne” という題目で発表しました。

舟場准教授が、国際共同研究促進プログラムにより、Andreas NIEDERBERGER 氏（デュースブルク・エッセン大学、ドイツ）を特任教授として招き、同氏と共同で第 1 回大阪哲学ゼミナール（2015 年 3 月 17 日～ 23 日）を開催しました。

須藤教授が、科研「普遍主義と多元主義の相互検討――ショーペンハウアーとニーチェを中心に」（課題番号 24520033）第 4 回研究会（2015 年 3 月 1 日・龍谷大学）にて、「ニーチェの遠近法主義：いま一つの可能性」という題目で招待講演を行いました。また、第 26 回関西ハイデガー研究会（2015 年 6 月 21 日・京都大学）、第 27 回同研究会（2015 年 7 月 19 日・京都大学）にて、「Indifferenz とはなにか――『存在と時間』の「透視」のために」という題目で発表しました。

須藤教授が、日独文化研究所による哲学講座、2014 年度初春講座「ショーペンハウアーとニーチェ」（2015 年 2 月 21 日～ 3 月 21 日、全 3 回）にて講師を務めました。

望月教授の論文 “A Philosopher’s Defeat in World War II: Tanabe Hajime’s Conversion to Shin Buddhism in Philosophy as Metanoetics” が、*Prajna Vihara: journal of philosophy and religion*, Vol 14, No 1-2 January-December 2013（Assumption University, Thailand）に掲載されています。また、望月教授による書評「フィリップ ·G・アルトバック、ホルヘ・バラン編／米澤彰純監訳『新興国家の世界水準大学戦略』（東信堂、2013 年）」が、大学評価学会年報『現代社会と大学評価』第 9·10 合併号（2014 年 8 月発行）に掲載されています。

中村准教授の共著書、日本学術振興会「科学の健全な発展のために」編集委員会編『科学の健全な発展のために――誠実な科学者の心得』（丸善出版）が、2015 年 4 月 9 日に刊行されています。

中村准教授が 2012 年 11 月より、『Rimse』（一般財団法人理数教育研究所発行、季刊）にて連載していた「社会のなかの科学技術」（全 10 回）は、2015 年 2 月号をもって終了しています。

野々村助教が共訳者となっている、『デカルト全書簡集　第七巻（1646-1647)』（知泉書館）が 2015 年 1 月 30 日に、また同じく『デカルト全書簡集　第三巻（1638-1639)』が同年 2 月 25 日に刊行されました。

関西哲学会第 67 回大会（2014 年 10 月 25 日～ 26 日·関西学院大学）にて、天野恵美理院生（哲学哲学史博士後期課程在籍）が「『物質と記憶』における身体の問題――ヴァリアントとの比較を通じて」、大塚高弘院生（同）が「スピノザにおける自然権の委譲について」、阿部倫子院生（同）が「ライプニッツ『モナドロジー』における現実世界：概念的規定とモナド」、谷山弘太院生（現代思想文化学博士後期課程在籍）が「ニーチェ『曙光』における道徳批判についての考察」という題目で発表しました。

高千穂大学総合研究所シンポジウム「21 世紀における哲学的思考の射程――政治・経済・文化を結んで」（2014 年 11 月 29 日・高千穂大学）にて、大久保歩院生（現代思想文化学博士後期課程在籍）が、「代表制の危機と表象批判」という題目で講演を行いました。なお、同名の論文が高千穂大学総合研究所年報『総合研究』第 28 号（2015 年 3 月 31 日発行）に掲載されています。

日本ショーペンハウアー協会第 22 回ニーチェ·セミナー（2014 年 11 月 30 日·日本大学）にて、谷山弘太院生が「ニーチェ『悲劇の誕生』におけるアポロンについて」という題目で研究発表を行いました。同第 23 回ニーチェ・セミナー（2015 年 5 月 2 日～ 5 月 3 日・大学セミナーハウス）にて、谷山弘太院生が「ニーチェ『人間的、あまりに人間的』における歴史的哲学」、井西弘樹院生（現代思想文化学博士後期課程在籍）が「ニーチェ中期思想の二つの転回」、生島弘子氏（同単位修得退学）が「フェミニズムの先駆的思想としてのニーチェ」という題目で発表しました。

日本ディルタイ協会研究大会（2014 年 12 月 6 日・慶應義塾大学）にて、入江祐加院生（現代思想文化学博士後期課程在籍）が、「歴史的自己省察と相対性――歴史的現実の内部で働く「運動」の概念」という題目で発表しました。

第 22 回関西ハイデガー研究会（2015 年 2 月 15 日・京都大学）にて、西村知紘院生（現代思想文化学博士後期課程在籍）が、「初期フライブルク期ハイデガーの歴史概念について」という題目で発表しました。

日仏哲学会 2015 年春季研究大会（2015 年 3 月 21 日・大阪大学）にて、多田雅彦院生（哲学哲学史博士後期課程在籍）が「思考のイマージュと存在論――ドゥルーズ『差異と反復』から」、立花達也院生（同博士前期課程在籍）が「スピノザ『エチカ』における変化の問題」という題目で発表を行いました。

立命館大学先端総合学術研究科主催、2014 年度国際カンファレンス「カタストロフィと正義」

（2015 年 3 月 23 日～ 3 月 25 日）にて、戸谷洋志院生（現代思想文化学博士後期課程在籍）が「福島第一原発事故をめぐる「カタストロフィ」解釈の諸相」という題目で発表しました。

応用哲学会第 7 回年次大会（2015 年 4 月 25 日～ 26 日・東北大学）にて、戸谷洋志院生が「原子力発電所と想像力――科学技術文明をめぐるアンダースとヨーナスの思想の比較」という題目で発表しました。

日本哲学会第 74 回（2015 年 5 月 16 日～ 17 日・上智大学）にて、藤野幸彦院生（哲学哲学史博士後期課程在籍）が「スピノザ『エチカ』における様態概念の定位：産出の因果性に関する研究として」、阿部倫子院生が「ライプニッツ『モナドロジー』の現実世界：偶然的真理と主体の選択」という題目で発表を行いました。

北海道大学哲学会 2015 年度前期研究発表会（2015 年 7 月 19 日・北海道大学）にて、立花達也院生が「スピノザにおける身体の維持と再生成」という題目で発表しました。

日本倫理学会第 66 回大会（2015 年 10 月 2 日～ 4 日・熊本大学）にて、戸谷洋志院生が「ヨーナスにおける責任原理の人間学的解釈の試み」という題目で、谷山弘太院生が「ニーチェ『曙光』における「習俗の倫理」の問題――ニーチェは何故道徳を批判するのか？」という題目で発表しました。

スピノザ協会年報『スピノザーナ』第 14 号（2015 年 1 月 10 日発行）に、大塚高弘院生の論文「『神学・政治論』における神の法と表象知――モーセの律法の位置づけをめぐって」、藤野幸彦院生の論文「スピノザ『エチカ』における様態概念の解釈――個体としての個物とその存在論的身分について」が掲載されています。なお、スピノザ協会第 64 回研究会・合評会（2015 年 10 月 10 日・大阪大学）にて掲載論文の合評会が行われました。

哲学若手研究者フォーラム論文集『哲学の探究』第 41 号（2014 年 4 月発行）に、原田淳平氏（哲学哲学史博士後期課程単位修得退学）の論文「真理はいかにして多元的でありうるのか――真理の多元主義自体の多元性の考察」、仲宗根勝仁院生（哲学哲学史博士後期課程在籍）の論文「二次元意味論にもとづくチャーマーズのフレーゲ的意味論について」、下山惣太郎院生（同博士前期課程在籍）の論文「実体の区別とルーマンにおけるオートポイエーシス」が掲載されています。同第 42 号（2015 年 4 月発行※電子媒体のみ）に、立花達也院生の論文「スピノザ『エチカ』における個体論の意義――第二部自然学的付論の読解」、藤野幸彦院生の論文「スピノザ『エチカ』におけるコナトゥスの定位――活動としてのコナトゥスと精神の現実的本質」が掲載されています。

雑誌『科学』第 85 巻 5 号・2015 年 5 月号（岩波書店、2015 年 4 月 28 日発行）に、戸谷洋志院生の論文「現代思想のなかの原子力発電所」が掲載されています。

関西哲学会年報『アルケー』第 22 号（2014 年 7 月 15 日発行）に、井西弘樹院生の論文「ニーチェ『人間的、あまりに人間的』における正義論」が掲載されています。また、同第 23 号（2015 年 6 月 30 日発行）には、天野恵美理院生の論文「『物質と記憶』における身体の問題――ヴァリアントとの比較を通じて」、藤野幸彦院生の論文「スピノザ『エチカ』における様態概念の定位――偶有性概念への反駁として」が掲載されています。

戸谷洋志院生の論文「人類の存続への責任と『神の似姿』――ヨーナスの責任倫理の基礎付けをめぐって」が、中外日報社の主催する第 11 回「涙骨賞」にて奨励賞を受賞しました。

嘉目道人院生（哲学哲学史博士後期課程）が、2015 年 3 月に「超越論的語用論の再検討――現代のフィヒテ主義は可能か」という題目で博士（文学）の学位を取得しました。

（野々村）

○　臨床哲学

本年度、当研究室には、学部生が 28 名、大学院生が 26 名（前期課程 11 名、後期課程 15 名）在籍している。浜渦辰二教授、本間直樹准教授（兼任）、稲原美苗助教の各スタッフが、哲学哲学史・現代思想文化学の教員と連携しつつ、教育・研究活動に従事している。

本年度は非常勤講師として、家高洋氏に「メルロ＝ポンティの思想」を、マイケル・ギラン・ペキット氏に「Ethics in English」を担当していただいた。また、久保田徹特任准教授（大阪大学コミュニケーションデザイン・センター）に「思考の活動とメディア」を、菊地建至氏に「臨床哲学フィールドワーク」を、それぞれ本間直樹准教授と共同で、担当していただいた。

哲学哲学史・現代思想文化学専門分野とともに機関誌『メタフュシカ』第 45 号を「中岡成文教授退職記念号」として刊行し、臨床哲学の教員 3 名、院生 4 名の論文、1 名の文献紹介が掲載された。研究室の雑誌『臨床哲学』第 16 号を web 上で 2015 年 3 月に刊行した。（2014 年度より年に一度の刊行になった。）

昨年度に引き続き本年度も臨床哲学研究会を 2 回に開催した。昨年度の開催について、まず 2015 年 2 月 7 日に「第 36 回臨床哲学研究会」（「ケアの臨床哲学」研究会の共催）を開催した。東北地方で活躍されている当研究室の修了生 3 名を招き、研究発表をしていただいた。大北全俊（東北大学大学院医学系研究科助教）が「HIV 感染症と臨床哲学」を、辻明典（福島県南相馬市立原町第二中学校社会科教員）が「原発禍の臨床哲学」を、そして、西村高宏（東北文化学園大学保健福祉学科教授）が「瓦礫のなか、哲学のすみかはどこに？　～被災地における「哲学的対話実践」の試み～」を発表した。

本年度に入り、2015 年 7 月 25 日に「第 37 回臨床哲学研究会」（「ケアの臨床哲学」研究会の共催）を開催した。「合評会：中岡成文『養生訓問答』」と題して、合評会中心の研究会を企画した。最初に、鈴木径一郎（博士後期課程在籍）が「日々のメンテナンス――相続者として、ビギナーとして」を発表した。その後、中岡成文（元大阪大学教授）や河村厚（関西大学法学部教授）を招いて、フランツィスカ・カッシュ（博士後期課程在籍）と川崎唯史（博士後期課程在籍）とともに、合評会を行った。

臨床哲学の新しい課題に取り組むべく、長らく「臨床哲学ネットワーキング」として開講されてきた授業を「ひろば臨床哲学」という名称に昨年度から変えた。学部生と院生が合同で、社会人の参加も受け入れ、倫理学から臨床哲学にわたる問題をともに発見し、共同研究を行い、クリティカル・シンキングやコミュニケーション力をつけることを目的に展開してきた。参加者それぞれの関心を優先しながら、特定のテーマ（2015 年前期は、「家族と子ども」、「アートと居場所」、「長吉高校」、「哲学カウンセリング」、「社会的な生き方」、「ケア」という 6 つのテーマが、そして、後期は、「学校に関わる問題」「からだ」「若者の生き方」「対話」という 4 つのテーマが出た）についての共同研究を行うグループを作り、その研究成果を発表して対話を行っている。後期には、そのテーマに即したゲストスピーカーからお話を伺い、ともに問題意識を共有し、対話を重ねている。

浜渦辰二教授は、自身が代表をしている「ケアの臨床哲学」研究会の主催するシンポジウム「超高齢社会のなかで成年後見制度を考える」（2014 年 9 月 13 日）、「超高齢社会のなかで認知症を生きる」（2015 年 2 月 28 日）、「超高齢社会のなかで障がいを考える」（同 5 月 30 日）、「超高齢社会のなかで地域包括ケアを問い直す」（同 8 月 30 日）を、いずれも大阪大学中之島センターで行った。また、講演を、「保健医療の現場で当事者の価値に寄り添う倫理とは」（日本社会福祉会・日本医療社会福祉協会主催、2014 年 8 月 30 日、エルイン京都）、「医の倫理：言葉の不思議さ、重要性について」（第 47 回東洋鍼灸医学大講演会、同年 11 月、芝蘭会館稲森ホール）、「意思決定支援のあり方」（第 2 回　高齢者障がい者なんでも相談会総括フォーラム 2015 年 3 月 7 日、岡山きらめきプラザ）、「尊厳死って何ですか？」（2015 年度　第 1 回　リビングウィル勉強会、同年 4 月 5 日、神戸市勤労会館）、「リビングウィル（どう生きるか？）について」（講演会・シンポジウム「あなたは最期をどのように暮らしたいですか？　――在宅ホームホスピスとは――」、同年 7 月 4 日、大阪市旭区民センター）、「地域で暮らし続けるとは／からほりモデルを考える」（同年 9 月 12 日、第 1 回からほりケア CAFÉ、大阪市中央区上町荘）、「いつかやって来る死のことを考えておきたい」（老い支度教室「エンディングノートを書こう」、同年 10 月 3 日、神戸生活創造センター）を行い、シンポジウム提題を、「ドイツにおける事前指示書の法制化の内実――自律と依存を両立させる試み」（静岡大学哲学会第 37 回大会シンポジウム「欧州における看取りと自己決定」、同年 11 月 3 日、静岡大学）、「生老病死と共に生きる――ケアの臨床哲学にむけて――」（日本哲学会第 74 回大会〈シンポジウム：ケア――共に生きる――〉、2015 年 5 月 16 日、上智大学）、「さまざまなケア場面での「在宅・地域ケア」への動きから考える」（第 41 回日本保健医療社会学会、同年 5 月 17 日、首都大学東京）を行った。また、海外では、次の発表を行った。From my experience of having lost two mothers- On dying after living with dementia from a second-person perspective of Japanese philosophical researcher -, Uppsala University, Centre for Gender Research, 2014.10.10., Uppsala University, Sweden; Dementia as a sickness of interpersonal relationship, International conference in Norrköping “Life with Dementia: Relations”, October 15-17, 2014, Centre for Dementia Research, Linköping University, Norrköping, Sweden; A Comparative Inquiry into “Advance Decisions” in Japan, Germany and the UK, Medical Humanities Seminar Series Spring 2015, The Body: Health, Wellbeing and Vulnerability, 2015.02.18., University of Hull.; “Dialogue in Husserl‘s phenomenology and psychiatry” at an interdisciplinary workshop “DIALOGUE AND INTERSUBJECTIVITY”, at Helsinki University, Finland, 2015.09.16.; “Intersubjectivity of Ageing - Reading Beauvoir’s The Coming of Age”, at the seminar for philosophy of Helsinki University, Finland, 2015.09.18.; “Dialogue in Psychiatry and Person-centered Care”, at the Psychiatric Team for the Elderly in Borås, Sweden, 2015/09/21.; “Intersubjectivity of Person-centred Care: a phenomeno-logical perspective”, At Centre for Person-Centred Care (GPCC), University of Göteborg, Sweden, 2015.09.22. フィンランド・ヘルシンキ大学よりサラ・ヘイナマー教授をお招きして、公開講演会 “Transformations of Old Age: Selfhood, Normativity, and Time” および公開セミナー（2015 年 3 月 23−25 日）を企画した。また、上智大学グリーフケア研究所（大阪サテライト教室）人材養成講座で「臨床哲学」の講義を 2015 年度前期 15 回で行った。

本間直樹准教授は、大学院生らとともに大阪府の高校や他県の高校に出講して哲学対話の授業を実施、2015 年 5 月 22 日、システム制御情報学会大会（SCI2015）にて「コミュニケーション

デザインとしての対話」を発表、7 月 18 日、日本ホスピス緩和ケア協会 2015 年次大会において、講演「臨床哲学と対話」を、10 月 18 日、哲学プラクティス連絡会第 1 回大会（立教大学）にてワークショップを行う。監修を務める「アートミーツケア叢書」の第 2 巻として『生と死をつなぐケアとアート：分かたれた者たちとの共生のために』（生活書院、11 月）を刊行した。また京阪電車なにわ橋駅構内アートエリア B1 にて「中之島哲学コレージュ」を定期的に開催している。

○稲原美苗助教は、2014 年 10 月 15 日から 17 日にスウェーデン・リンショーピン大学で開催された「第 2 回国際認知症学会」での個人発表にて「認知症患者の自己喪失感：コーラと曖昧な自己観について」を、同年 11 月 29 日から 30 日に東洋大学で開催された「日本現象学会第 36 回研究大会」の男女共同参画・若手研究者ワーキンググループ・ワークショップにて「フェミニスト現象学とその応用――つながりの「知」への展開」を発表した。同年 12 月 20 日にサンドラ・ハーディングを迎えて行われた東京大学大学院 IHS「科学と共生社会のための哲学の検討」シンポジウムにおいて、「フェミニスト・スタンドポイント・セオリーと当事者研究で考える身体障害とその状況対応型経験知について」を発表した。2015 年 1 月 24 日に開催された東京大学大学院総合文化研究科附属「共生のための国際哲学研究センター（UTCP）」の企画イベント「アビリティ・スタディーズへの試み」で、「能力・障害のパーフォーマティヴィティ：ジュディス・バトラーのジェンダー論から再考するアビリティ」を発表した。同年 2 月 17 日に「医療人文学セミナーシリーズ 2015 年春季――保健、ウェルビーング、脆弱性」（ハル大学・イギリス）の一環として、一般の人々に向けた講演「ヒーリングアート――精神障害者の自己表現」を行った。その後、稲原自身が共同研究者をしている「未来知創造プログラム」（学内共同研究の仕組みづくり）「歯科医療現場における障害のある子どもとその親への包括的支援プログラムの開発」主催で、講演会および研究活動報告会を 2 月 28 日に石原孝二氏（東京大学大学院総合文化研究科准教授）を迎えて大阪大学中之島センターで開催した。その際に、博士後期課程に在籍している青木健太氏と「歯科医療現場からみた障害のある子どもをもつ親の悩みについて――哲学対話から」を共同発表した。同年 3 月 23 日から 25 日に大阪大学で開催された「サラ・ヘイナマー教授（フィンランド）来日企画（公開講演会・公開セミナー）」にて、「障害のある子どもをもつ母親の生活世界のフェミニスト現象学的探究」を発表した。そして、同年 6 月 20・21 日に京都大学で行われた「京都カンファレンス 2015――拡張した心を超えて : 異邦の身体、人形、女の魂、東洋の精髄」において、「フリーダ・カーロの自画像：痛み、情熱、障害のアート」を発表した。同年 5 月に 1 か月間、フィンランド・ヘルシンキ大学のイリーナ・ポルシェチェック氏が来日し、彼女と院生が学術交流を深めるために「Phenomenology and Vulnerable Others」連続セミナーを企画した。

また、上述した「未来知創造プログラム」（学内共同研究の仕組みづくり）の助成を受けて、大阪大学歯学部附属病院障害者歯科診療部において、障害のある子どもをもつお母さん方や歯科医師を対象に哲学カフェを院生の青木健太氏とともに企画し、定期的に開催している。

本年度の開講授業は以下の通り。「倫理学の研究方法 A・B・C・D」（浜渦、本間、稲原）、「臨床哲学研究 A・B・C・D」（浜渦、本間、稲原）、「ケアの臨床哲学講義――老いとそのケア――」、「現象学外国語文献講読」、「ケアの臨床哲学演習――老いとそのケア」（以上、浜渦）、「外国語文献講読演習Ⅰ」「対話技法論 : ともに探究するⅠ・Ⅱ」（以上、本間）、「外国語文献講読演習Ⅱ」（稲原）、「思考の活動とメディアⅠ・Ⅱ」（本間、久保田）、「臨床哲学フィールドワークⅠ・Ⅱ」（本

間、菊池)、「メルロ＝ポンティの思想」(家高)、「Ethics in English 2015A・B」(ペキット)。

当研究室では、2 回生から研究を行い、発表をするという演習方式の科目を開講している。それは、プレゼンテーション能力を向上させることのみではなく、聴講後それぞれの研究について対話できる力をつけることを目標にしている。臨床哲学の研究活動領域は「生命(医療、看護・介護ケア、福祉、生命の倫理など)」、「身体(エイジング、ジェンダー、セクシュアリティ、障害など)」、「環境(災害、都市環境、自然、経済など)」、「科学(科学と対話、科学教育、最先端技術の倫理など)」、「教育(哲学教育、子どもの哲学、対話教育、芸術と対話など)」など多岐にわたる。

(稲原)